

Spot

第120回

今回の会員SPOTは、福島区で阪神野田駅前ファミリークリニックを開業されている衣畑 成紀 (きぬはた・しげき) 先生を訪ねました。先生は、「総合診療医」として、患者さんの心の健康面や家族関係、就労・経済状況などの生活背景まで多角的に診ておられます。今回は総合診療医としての思いやクリニックのモットーなどについてお聞きしました。インタビューは編集部です。



福島区

衣畑 成紀 先生

いったとしても、隔たりは残ったままです。患者さんからも距離を縮めていただくために、病気などのパンフレット提供や健康講座など、患者さん自身が医療を知るためのサポート活動を積極的に行っています。互いの距離が近づくと、認識の齟齬も減り、より良い医療が実現できると考えます。

3点目が「信頼されるクリニックになる」ことです。地域の患者さんが「当院に来れば安心だ、何とかしてもらえ」と思ってもらえるよう、精いっぱい努力をしています。

「病気でなく、病人を診る」です。病気という生物学的な単一の問題だけでなく、精神面や、社会的・経済的な面を含めてトータルに診ることを常に心がけています。これが当院のモットーでもあります。

「開業のきっかけについて教えてください。」
私は元々「総合診療医」として、大病院やクリニックなどで研鑽を積んできました。総合診療医は「横方向の専門」とも呼ばれ、一人ひとりの患者さんのために、幅広い疾患に対応するだけでなく、精神的な問題や社会的・経済的な背景にまで目を向けて、多角的に診ることを心がけます。そうして経験を積むうちに、自身の知識や経験をより多くの人に生かしたいという思いが強くなり、開業を決意しました。

「開業にあたり、どういうクリニックを目指されたのでしょうか。」
3点あります。まず1点目が「患者さんの『つらい、しんどい』という暗い気持ちに光を当てる」ことです。患者さんは、医療機関に対して不安な気持ちを抱えながら受診しています。そうした不安が少しでも和らぎ、気持ちも明るくなるようなクリニックにしたいと考え、内装なども工夫しました(写真)。

2点目が「互いに歩み寄るための努力をする」ことです。医師と患者さんの間には、医学的知識の差も含め、大きな隔たり・心理的距離があります。医師としては、患者さんに寄り添い、歩み寄るための努力が必要ですが、私たちが距離を縮めて

モットーは「病気ではなく、病人を診る」

総合診療医として患者さんと共に歩む



「森林浴&木漏れ日」をコンセプトにした院内

「趣味や休日の過ごし方などについて教えてください。」
ブラジルの国技でもある格闘技「カポエイラ」が趣味で、実際にブラジルで指導を受けたこともあります。ただ、最近は忙しくほとんど行えていません。今は、子どもと過ごす時間が唯一の楽しみとなっています。
早くコロナが収束して、趣味や子どもとの時間を気兼ねなく楽しめるようになってほしいと思います。

このモットーを実現するためには、患者さんが「自身の背景も含めて、何でも話してもらえよう」にしなければいけません。当院のスタッフ一同、患者さんが話しやすい雰囲気になるように心がけています。
「コロナ禍で大変な中ですが、行政に対する要望はありますか。」
患者さんの中には、事実と異なる情報によって、必要以上に不安を感じておられる方がいらっしやいます。そのため、まずは正しくわかりやすい情報を入手しやすくする工夫をお願いしたいと思います。
また、コロナワクチン接種に関しては、細かな点が決まっていないことが多く、そのために現場は非常に混乱しており、どこに相談しても回答が得られないこともありました。ワクチンの配送に関しても、休診日に配送されてしまつたなど、医院には余計な負荷がかかってしまいました。行政に対しては、医療現場にこれ以上の混乱や負荷をかけないように、適切な対応・調整などをさせていただきたいと思っています。